

<水稻の栽培ポイント>

1 生育状況

- 田植え作業は順調に行われ、その後の気象により生育も平年並みに推移しています。
- 気象庁の3か月予報（6月25日発表）によると、7月から9月の平均気温は高いと予想されています。気温が高いと水稻の出穂期が早まる可能性があります。草刈りや薬剤散布のタイミングを逃さないように注意しましょう。また、出穂期前後の水管理を丁寧に行い、乳白米や胴割米の発生を抑え、高品質米の栽培に努めましょう。

2 水管理

(1) 間断かん水の継続

中干し後、出穂期まで3日～数日おきにかん水と自然落水を繰り返す間断かん水を行います。葉色が平年よりも薄いほ場や、茎数が不足しているほ場では強い中干しは行わず、追肥まで間断かん水を継続します。ほ場の足跡に水が残るくらいで入水するようにしましょう。出穂期～開花期は最も水を必要とする時期です。出穂前3日程度～出穂後5日程度の間は特に水を切らさないようにしましょう。

(2) 出穂後の高温対策

出穂～出穂後20日に高温（最高気温30℃以上）が予想される場合には、胴割米や乳白米等の発生を防ぐため、夕方から夜間のかん水により地温を下げ、根の活力維持を図りましょう。高温時の常時湛水は水温が上がり、根腐れが起こりやすくなります。

(3) 出穂後の落水

早期落水は登熟歩合の低下や乳白米、胴割粒の発生を増加させ、収量・品質の低下を招きます。落水は出穂後30日～35日頃を基本としましょう。その後も高温・多照が続く場合は、ほ場条件を考慮し、収穫7～10日前まで走水を実施しましょう。

3 穂肥の施用

適期の穂肥施用は1穂初数を増やし、粒の充実を促すなど、収量や品質確保に重要です。葉色が淡く茎数が不足している場合は、下表より2日程度早い追肥を行います。早めの追肥は倒伏を助長することもあります。また、多量施用や遅い施用は玄米中の粗タンパク質含有率を高めて食味を低下させるなどの悪影響を及ぼしますので注意しましょう。

(1) 穂肥適期

稲の生育状況に応じて、適期に適正な量を施用しましょう。

ただし、基肥一発（BBあさひの夢専用、とちぎの星専用など）を使用した場合は極端に葉色が淡い場合を除き、原則穂肥の必要はありません。

品種名	穂肥の時期	10a当たり施肥量(肥料の例)
コシヒカリ (早植)	出穂の15日前 (幼穂長20mm)	窒素成分2～3kg NK-505号(速効性肥料):15～20kg NK-205号(一発穂肥専用肥料):10～15kg
とちぎの星 (普通植)	出穂の15日前 (幼穂長20mm)	
あさひの夢 (普通植)	出穂の18～20日前 (幼穂長5mm)	

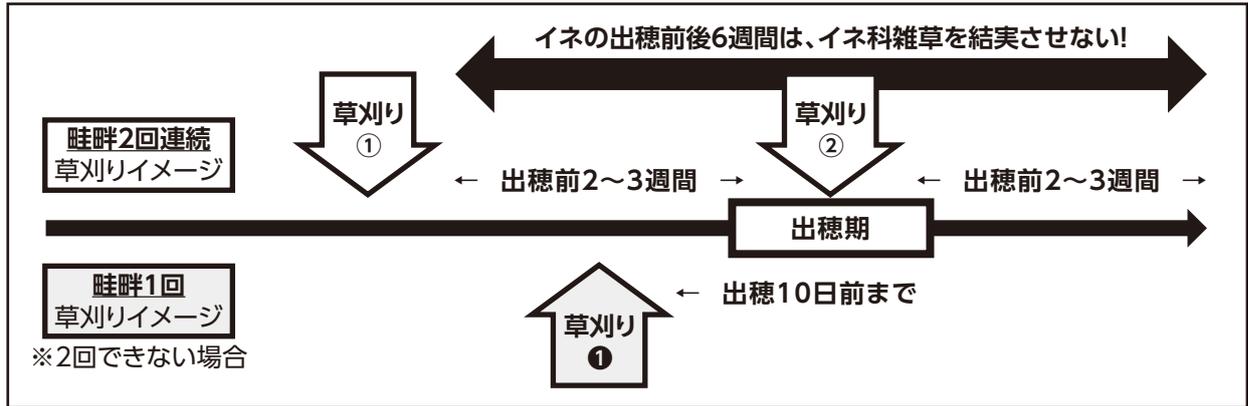
(裏面あり)

4 斑点米カメムシ類の防除対策【重要】

(1)カメムシ類の対策は除草が基本です。水田周辺のイネ科雑草の結実を長期間抑え、カメムシ類の水田への侵入を防ぐため、水稲の出穂2～3週間前と出穂期頃の2回除草を行いましょう。両時期の除草ができない場合は、水稲の出穂期10日前までに除草を行いましょう。

※出穂期：一粒でも止葉から籾が出たら出穂とみなし、ほ場の全茎数の40～50%が出穂した日のことです。

※出穂期前後のみの除草は、カメムシ類を水田へ追い込み、水稲の穂を集中加害させることになるため、原則行わないようにしましょう。



(2)出穂期から穂ぞろい期頃に水田内で斑点米カメムシ類が認められる場合には、薬剤防除を行いましょう。液剤は出穂期7～10日後まで、粒剤は出穂期～出穂期7日後までに散布しましょう（下表）。その後も斑点米カメムシ類が見られる場合は、7～10日間隔で1～2回追加防除しましょう。

※穂ぞろい期：ほ場の全茎数の80～90%が出穂した日のことです。

※小型のカメムシ類（イネホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ）には粒剤や豆つぶ剤の防除効果がありますが、大型のカメムシ類（クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ）は、直接薬剤がかからないと薬剤の効果が十分に発揮されないため、粉剤や液剤で防除を行いましょう。

【カメムシ類に登録のある防除農薬の例】

令和6年7月2日時点の登録内容

農薬名	希釈倍数、散布量	使用時期	使用方法	使用回数
スターフル豆つぶ	250g/10a	収穫7日前まで	散布	3回以内
トレボンEW	1000倍 60～150L/10a	収穫14日前まで	散布	3回以内
スミチオン粉剤 3DL	3～4kg/10a	収穫21日前まで	散布	2回以内 (但し、出穂前は1回)

農薬はラベルの表示を確認して正しく使用してください。

※本年産は斑点米カメムシ類の発生が多いと予想されていますので防除の徹底をお願いします。

※水稲農薬空中散布（無人ヘリ防除）実施日程は、北部8月1日、東・南部8月19日～20日です。

5 稲こうじ病について

現在の農産物検査規格では、稲こうじ病による被害粒の混入が確認された場合は規格外になってしまいます。

昨年発生が多かったほ場では、土壌中の菌密度が高く、今後の気象条件（低温・穂ばらみ期の多雨）によっては多発生するため、防除時期を逃さないようにしましょう。

※防除等については、先月号の営農情報を御確認ください。